魔王とその友人

ぽち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王とその友人

【Ｎコード】
Ｎ１８５０Ｕ

【作者名】
ぽち

【あらすじ】
林　翔＞ハヤシ　カケル＜は困惑していた。
いま置かれている状況をどう受け止めたらいいものかと考え、ひとまず本日の自分の行動を思い返してみることにした。
異世界に召喚されたらしい学生と、召喚した魔王の話です。

（前書き）

初めて書いた話です。
どなたか1人でも楽しんでいただけたなら幸いです。

林　翔＞ハヤシ　カケル＜は困惑していた。
いま置かれている状況をどう受け止めたらいいものかと考え、
ひとまず本日の自分の行動を思い返してみることにした。

今日は金曜日。
学校の授業が終わり、帰宅部らしく帰路に着いた。
電車に乗り、自宅最寄り駅前のスーパーで買い物をした。
買い物の内容は食事を作るための食材と、お菓子作りの材料。
ヘビーワーカーの両親は何時も通り土日も家に帰らないと予想されたので、
土日は趣味のお菓子作りを堪能しようと思っていた。

スーパーから自宅に向かうため、何時もと同じ帰路を歩いていた。
マンション建築現場の横を通ったところで頭上から何かがぶつかる音と、
「危ない！」という声が聞こえたため上を向いたところ、鉄骨が自分目掛けて落ちてくるところだった。

驚いて動けなかったのではなく、持ち前の諦めの良さで逃げることを諦めた。
痛いのは嫌だな。と思いつつ目を閉じた。
今まで経験した事の無い痛みが体を襲うか、瞬時に思考が途切れるだろうと予測していたが、
いっこうにどちらも訪れることがなかった。
落ちてきていはずの鉄骨が自分の元におちてこなかった、
はたまた鉄骨が落ちてきていたと思っていたが、実は目の錯覚だっ

たのかと思い目を開けたところで冒頭に戻る。

先ほどまではマンション建築現場の横の道を歩いていた。
季節は梅雨が過ぎた初夏。辺りは明るかったはずだ。

どうして目を閉じて開けたら薄暗いところに居るんだ？
辺りを見回したところ、何処かの部屋の中。
海外ドラマや映画で出てくるような地下室といったイメージを受ける。
出口はないかと後ろを振り返るとそこには自分と同じぐらいの年頃の子供がいた。

全体的に黒いという印象を受ける。服とか髪とか。
その子供は目を大きく見開いてこちらを見詰めていた。

「・・・・」
「・・・・」

お互い無言で見詰め合うこと数秒。
子供は口を開けたり閉めたりして何かを言おうとしている。

「っあ・・・」
「・・・・」
「っ・・・・・ああああああああの」
「・・・・」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおともだちになってください！！！」
「・・・・」

なるほど。

解せぬ。

「状況把握」

「ふへっ！？」

「ここは何処だ。お前は誰だ。迅速、かつ正確に答えろ。いま、すぐに。」

子供に一通り説明された事を頭の中で整理する。

ここはフラグレントという国の首都にある王城の地下室。

子供の名前はムラリス。この国の王である、らしい。

曰く、父である前王から「欲しいものは力づくで手に入れろ。」と言われたらしく、

欲しいもの＝友達を召喚したらしい。

いろいろ突飛すぎる行動に頭が痛くなる。

「召喚した奴がお前の友人になってくれる可能性について考えたか。そして、突然こんな場所に呼び出された側の者の身になって考えた事はあるのか。」

「そ・・・それは・・・」正座して縮こまっていたがさらに小さくなって

「ごめんなさい・・・」と聞き取れるか取れないかぐらいの声で言う。

「あなたの言うとおりです。自分勝手すぎますね・・・。ごめんなさい・・・。」

泣くのを我慢するような押し殺した声で言った後、

下を向いてしまった奴の前に膝をつき肩に手をかけて
「これから学べばいいだろ。分別ってやつを」といってやったら泣き出されて困った。

落ち着いた奴に帰してくれと頼んだら「必ずや送り届けます！どちらにお住まいですか？」などと聞いてきたから
「日本」と答えたら、まさに目が点といった顔になった。
鞄の中から地理の授業で使った世界地図の本を取り出し、「ここが日本だ」と世界地図の日本を指差すと奴の元々白い顔から一層血の気が引いていく。

”召喚”という言葉を聞いた時から予想していたが、ここは異世界。
”日本”なんて国は無い。
しかも奴の慌てふためき様から察するに帰し方が分らないのだろう。

「衣食住の保障」
「ひゃい！？」と返事をした奴に「その様子だと帰し方が分らないのだろう」と問いかけるとがっくりと項垂れる。
「だから、衣食住の保障をしろ。そして帰し方を探れ。責任を、取れ。」

恐らく今の自分はクラスメイトに「鬼のような形相」と例えられる表情をしているのだろう。
奴は青白い顔をして首を上下に激しく3度ほど振る。
そういえば奴は自分の事を国王だとか言っていた。王を相手に脅していることになるのか？
まぁいい。
しばらく帰れないのならば、この世界の知識を少しでも多く身に着けてやろう。

立ち上がり、まだ正座してこちらを凝視している奴に手をさしのべ、「よろしくな、ムラリス。」と口角を意識して上げながら声をかける。
一瞬驚いた奴、ムラリスはすぐさま笑顔を浮かべて手を取った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

林　翔＞ハヤシ　カケル＜は考えていた。
どうしてこうなった、と。

現在の季節、春。
現在地点、王城にある庭園の１つ。
現在のタスク、午後のお茶の準備。

今日のお茶菓子はシフォンケーキ。
生クリームのたっぷり盛られたシフォンケーキの皿をテーブルに配膳し、飲み物の準備をする。
茶葉をポットに入れ、お湯を注ぐ。カウントダウン開始。
茶葉の抽出時間を計っていると、少し慌てているような足音が聞こ

える。いや、実際慌てているのだろう。

「カケルくん、カケルくん。お待たせしました！すこし、遅れてしまいましたか・・・？」

大変申し訳なさそうな色の奴の顔を横目で見ながらポットを持ち上げ「いいや、ぴったりだ」とティーカップに茶を注ぐと奴は急いで席につく。

シフォンケーキの皿を見やって目を輝かせながら奴はこちらが席に着くのを待っている。

席に着いたのを確認すると、奴は「いただきます。」と両手を合わせてシフォンケーキを食べ始める。

「今日のお菓子も美味しいです！」と頬張る奴の能天気そのものの声に何故か疲労感を覚え深くため息を吐く。

「なにか心配事でもあるのですか？何か力になれることがあれば言ってくださいね！」

「・・・いいえ、魔王陛下のお手を煩わすような問題は御座いません。」

「ひぶふぇっっ」盛大に咽る奴に水が入ったコップを渡すと一気に飲み干し

「そ、そんな喋り方しないで下さい！・・・私たち、友達でしょう？」となにやら情けない顔をする。

「すまん」

「でも、何かあるのでしたら言って下さいね。私じゃ頼りにならないかもしれませんが・・・。心配です。」

「・・・・」

一度ため息を吐き「昔の事を思い出していた。」と言い、庭園を見

やる。美しい花々に若干心が癒される。
「昔の事というと・・・？」
「ここに召喚された時の事だ。」
「ああ、懐かしいですね。」
にっこりと笑う奴の顔を見て再度ため息を吐く。
「懐かしいと言うか・・・それから色々あったな、と。」

そうだ。色々あった。あり過ぎた。
まず、最初に奴に城内を案内された時に獣人やら何やら人ではない者達が多く疑問に思った。
彼らは何者かと尋ねれば何事も無いように「皆さん魔族ですよ。」との答え。さらに詳しく聞けばこの国は魔族を統べる国。
すなわち奴は”魔王”という存在だった。

魔族の国に召喚されただけでも大事なのに勇者、聖女、聖騎士団、神子の襲来。内乱に隣国からの侵略などなど。
どうにも大変な場所に、尚且つ大変な時に召喚されたとしか言えない。

「でも、カケルくんが居てくれて、助けてくれてとても嬉しかったです。」
ありがとう。これからも友達で居てくださいね。と言う奴に「ああ。」と返し2人で庭園を見る。

召喚されてから数度目の春。
林　翔＞ハヤシ　カケル＜はまだ帰れない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1850u/

魔王とその友人

2011年10月6日04時06分発行